

世界と京都が新たに出会う、文化・芸術の祭典

京都文化プロジェクト 2016-2020

(旧名称) 京都文化フェア(仮称) 2016-2020

基本構想

平成28年3月

「京都文化フェア呼びかけ」に基づく推進委員会

平成28年3月28日開催の推進委員会において、「京都文化フェア（仮称）2016-2020」から「京都文化カプロジェクト2016-2020」に名称変更されましたので、固有名詞を除き変更しています。

※表紙画：第152回日図展「琳派400年」入賞作品 増見 家弘

「京都文化フェア呼びかけ」に基づく推進委員会 ごあいさつ



委員長
長 尾 真

平成26年10月に推進委員会が立ち上がってから、この間、ワーキング会議を設置し、精力的にご検討いただくとともに、イベントアイデアの募集やワークショップを開催し、「京都文化力プロジェクト」に期待される様々なご意見やご提案を府民市民の皆様からいただきました。その結果が、この度まとめたこの基本構想です。

これから2020年に向けて文化的なイベントをいろいろ実施するというだけでなく、長期的な視野、大きな視点で、世界に冠たる文化・観光のみやこである京都から、日本文化を本当によく理解していただくための取組を積極的に進めていただきたいと思います。そして、この取組を通して、京都(日本)の人が京都(日本)の文化により一層の関心を持って大切にする取組が展開され、京都の文化力が高まっていくような、大きな効果をもたらすものとなることを期待しております。



副委員長 (京都市長)
門 川 大 作

1200年を超える歴史の中で、美しい景観と多様な文化を育み、磨き、高めながら、今日まで脈々と継承してきた京都のまち。この京都が誇る豊かな文化力を、147万の京都市民の皆様と共に、2020年、更にその先の未来を見据えて世界に発信していく取組が「京都文化力プロジェクト」です。

多くの皆様と共に練り上げたこの基本構想の下、本年10月の「スポーツ・文化・ワールド・フォーラム」をキックオフとして、オール京都で取り組んでまいります。

長年の京都の悲願であった文化庁の全面的な移転決定！これを大きな力に、文化を通じて京都から日本、さらには世界を元気にしていく決意です。「世界の文化首都・京都」への飛躍を目指して、共に力を合わせてまいります！



副委員長 (京都府知事)
山 田 啓 二

文化庁の京都移転が決定し、文化資源を活用した観光振興・地方創生や国際発信力の向上に大きな期待が寄せられています。その期待に応えていくためにも、「京都文化力プロジェクト」の果たす役割は大変重要であり、京都市や経済界、文化関係者の皆さんとともに取りまとめたこの基本構想をもとに、さらに具体の実施計画の検討を進め、今年(平成28年)10月の政府主催「スポーツ・文化・ワールド・フォーラム」を皮切りに、日本文化を代表する京都から世界に向けて発信してまいります。

京都府には、北から南まで各地に多様で豊かな文化があり、現在、地域の資源を見つめ直す「海・森・お茶」の3つの京都づくりの取組も進めています。オール京都で手を携えて、2020年に向けて文化の力で、京都から日本を盛り上げていきたいと考えます。



副委員長
(京都商工会議所会頭／
京都府商工会議所連合会会長)
立 石 義 雄

京都は日本文化の中核都市であり、歴史に培われた人々の生き方、暮らし方の知恵と産学公が連携する「知恵インフラ」をベースに、多様な交流のなかで知恵を高め、融合することで、伝統産業から先端産業まで、高品質・高付加価値型のビジネスモデルを発展させてきました。

文化庁の移転決定を追い風に、「京都文化力プロジェクト」を通じて、世界の人々や文化、産業の大交流を生み出し、京都が目指す「世界交流首都」を実現する礎となることを期待しております。

今年7月には、東京五輪に向けた「交流文化・観光の創造」をテーマに、全国商工会議所観光振興大会が京都で開催されます。この「京都文化力プロジェクト」が全国の文化プログラムのモデルとして評価されるよう、オール京都の知恵と力を合わせて成功に導きたいと考えております。

目 次

▶京都文化力プロジェクト2016－2020 基本構想	1
Ⅰ 世界の京都	1
1. 日本文化のふるさと・京都	1
2. “2020年東京オリンピック・パラリンピック”と京都	1
3. 「京都文化フェア（仮称）の呼びかけ」	1
Ⅱ 京都文化力プロジェクトがめざすもの	2
Ⅲ 基本方針	4
1. 京都文化力プロジェクトの枠組	4
2. 「世界の人々に京都の魅力を伝え、もてなす基盤づくり」に関する推進方策	4
1) 京都の人が京都の文化を知り、大切にすること	4
2) 国内外からの来訪者を迎える環境の整備	5
3) 文化・観光にかかわる情報の収集、蓄積と提供	5
4) 外国人への言語対応、災害時対応などの充実	5
3. 「世界の人々への京都の総合的な文化力の提示」に関する推進方策	6
1) 多様な主体が主催者として参画できるようにする	6
2) 京都府全域を舞台にし、地域振興にも資する	6
3) 段階的にイベントを実施する	7
4) 京都文化の良さを失わず、伝統産業の活性化に資する	7
5) 各種イベント情報の提供と保存	7
4. 「世界の人々と協働し、新たな創造の潮流を起こす」に関する推進方策	8
1) 京都の伝統文化をきちんと伝える	8
2) 京都の伝統文化を支える人々の活動の場をつくる	8
3) 伝統を活かした創造を生み出すしかけづくり	8
4) 国内外の若い芸術家等を呼び込み、垣根（るつぽ）とする	8
5) 京都文化力プロジェクトへの若者の参加	9
5. 3つの目標に向けた関係団体等との関係構築	9
1) 東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会等と京都の取組の関係構築	9
2) 府市の関係部局・関係団体の協力	9
Ⅳ 事業構想	10
1. 基本事項	10
2. 事業内容	10
1) インフラ整備	11
2) イベント計画	11
Ⅴ 推進計画	12
1. 実行委員会の立ち上げと体制	12
2. 広報計画	14
3. 財源の確保	14
▶京都文化フェアの呼びかけ	15
▶委員名簿等	16
▶今後検討を要する課題等	19
▶イベントアイデア募集等で寄せられたアイデア	29

I 世界の京都

1. 日本文化のふるさと・京都

京都は、すぐれた自然の風光と千年を超えて日本の都であった歴史を背景として、日本の伝統や文化を育んできた中心地であり、数多くの史跡、寺院・神社、庭園、文化芸術などの有形・無形の文化遺産を持つ日本の代表的な地として世界に知られている。京都は衣食住の様式から社交の作法、自然環境と調和した暮らし方などを編みだし、さらにそこから、粋を極めたさまざまな技芸・学問を生みだしてきた。日本の文化芸術の基本形が、ここには集積されている。

文化は、地域で生活する人間の発展基盤であり、原動力である。それは人と人の交流によって成り立ち、

いろいろなかたちで世界の人々と分かち合われるものでもある。グローバリズムの時代にこそ固有の文化に磨きをかけねばならず、そのためにどうあるべきかを常に考えねばならない。京都は1200年以上にわたりそのような努力を営々と続けてきた。

このような豊かな歴史を育んだ京都が、世界の文化と交流し、切磋琢磨して、新しい文化を創造する、そのような京都を作っていくことを我々はめざしたい。その中に京都の未来があり、それは日本の未来にもつながっている。

2. “2020年東京オリンピック・パラリンピック”と京都

オリンピックは平和でより良い世界の構築に貢献する世界最大の平和の祭典であり、また、スポーツの祭典であるとともに文化の祭典でもある。オリンピック憲章は、オリンピズムの根本原則に、スポーツと文化と教育の融合を謳っており、オリンピック組織委員会は、文化イベントからなる文化プログラムを実施しなければならないと規定している。

近年世界中の人達が訪れたい地として京都が目まくらしている中で、2020年東京オリンピック・パラリン

ピックは、京都に来て日本の文化芸術の粋を味わってもらう絶好の機会であり、2020年に向けて2016年から京都文化力プロジェクトを計画し、その実施に向けて本格的に取り組むことが時宜を得たものとする。

そして、京都文化力プロジェクトはイベントを行うだけでなく、京都が育んできた豊かな地域資源としての「ほんまもの文化芸術」「京都ならではの伝統産業と最先端産業」「日本を支える京都の学術」といったものに直に触れてもらう機会となることが大切である。

3. 「京都文化フェア（仮称）の呼びかけ」

2013年9月に2020年のオリンピック・パラリンピックの東京開催が決まった。これを受けて京都では、いち早く京都で文化フェア（仮称）を開催しようという取組が始まり、2014年8月に、京都、そして日本の文化的リーダーである5人の方々から「京都文化フェアの呼びかけ」が行われた。その趣旨は、オリンピックで世界の注目が日本に集まるこの機会に、京都が先がけとなって、日本文化の真髄と、日々の生活に根ざした日本人の深い精神性に基づく日本の文化を世

界に向けて発信していかなければならない、というものであり、また同時に、これからの日本の文化を担う若者たちの湧き上がってくる新しい創造の息吹を積極的に受容し、誰もが気軽に楽しめる多彩な文化の祭典を開催しようというものであった。

私たちはこの呼びかけを大きな力とし、オール京都体制での推進委員会を立ち上げ、この取組を進めるものである。

II 京都文化力プロジェクトがめざすもの

「世界に開かれた京都」～京都の文化を世界の人々が味わえるように

2020年東京オリンピック・パラリンピックでは、スポーツだけではなく文化芸術も含めて様々なかたちで世界の人々との交流が日本全国で活発化する。このようなときにこそ、京都のまちを世界に対して大きく開き、京都の文化を世界の人々に味わってもらうとともに、京都が体現している「日本」と、「世界」が文化を通して活発に交流し、そこに生まれる喜びや幸せを共有することが大切である。

それが、「世界の文化首都・京都」への道となり、世界への、そして来るべき次の世代への、いのち輝くこころの文化の伝達となる。こうした新しい京都の姿を実現していく契機とするために、下に示す3つの目標を掲げて、京都の文化を世界の人々が味わい、理解されることをめざす。そのためにも、オール京都で取り組んでいる文化庁の京都移転を進めることが必要である。

なお、この京都文化力プロジェクトは2016年から2020年東京オリンピック・パラリンピックが終わるまでの期間に実施するが、一過性の祭りに終わっては意味がなく、この取組を通じて京都が府民・市民にとって、また来訪者にとって、将来にわたってより良いものとなるように特に配慮する必要がある。したがって、この取組を通じて世界の関心を引く諸事業等についてはその後も継続することを検討する。

また、この京都文化力プロジェクトは、府民・市民、文化芸術団体（NPO等）、芸術家、大学、企業、経済界、行政など、様々な主体が実施主体となり、基本構想に掲げた目標、理想像に向けて、取組を進めていくこととする。したがって、本構想に掲載する内容は、現在取り組まれている事業、今後取り組むことが想定される事業について総合的にまとめ、京都全体でめざす姿を掲げるものである。

京都文化力プロジェクトでの基本的な目標は次の3つである。

- (1) 世界の人々に京都の魅力を伝え、もてなす基盤をつくる
- (2) 世界の人々に京都の総合的な文化力を提示する
- (3) 世界の人々と協働し、新たな創造の潮流を起こす

■ 目標 1. 世界の人々に京都の魅力を伝え、もてなす基盤をつくる

京都は、豊かな自然と、千二百年を超える歴史・文化が織りなす、恵まれた環境と美しい景観を有する地である。そこには固有の自然環境の中で伝統として受け継がれてきた都の文化と町衆による生活文化とが色濃く映し出されている。

この京都の魅力を広く世界に伝えるために、京都文化力プロジェクトを契機として、言語の対応、災害時の対応、生活への対応、短期・長期の滞在への対応、宿泊観光案内など、世界の人々に対応する様々な基本インフラを強固なものにし、その上で京都の文化発信を考えることが重要である。世界の人々に対応できるこうした基盤やそれを前提にしたもてなしがあってこ

そ、世界から訪れる人々は気持ちよく京都の文化を体験し理解し、マナーも守れるような「京都の文化への理解認識」につなげることができる。

特に京都の人々自らが京都の有形・無形の文化遺産を大切に、その維持、継承に力を尽くすとともに、景観や環境を維持するために自身のモラルをより高めることや、世界から訪れる人々の快適な京都での滞在を実現するために観光地域の整備、文化・観光にかかわる各種情報の収集や提供などのネットワークの整備などを進めることが考えられる。

こうしたもてなしの基盤づくりは、政策・施策レベルの中で進められるものもあれば、府民・市民一人一

人の心遣いの積み重ねで成し遂げられるものもある。
世界の人々をもてなす、上記のような基本的な体制
をつくることにより、これまで以上に世界から人が訪

れ、オリンピック開催年のみならず、その後も続くこ
とになるだろう。

■ 目標 2. 世界の人々に京都の総合的な文化力を提示する

京都には古くからの寺院・神社、名所・旧跡があり、
伝統的な町家や庭園、さらに多くの博物館、美術館等
があって、主たる観光の対象となっているが、このよ
うな有形の文化遺産以外にも、茶道、華道、能・狂言、
その他多くの無形の文化遺産や、これらを取り巻く景
観があり、関心を持つ来訪者も多い。

このような伝統文化^{※1}はもちろん、映画・マンガ・
アニメをはじめとする様々な文化芸術が京都府内各地
域で展開される一方、関西文化学術研究都市や桂イノ
ベーションパーク、府内50を超える大学等では創造
的な学術・研究が行われ、独創的な先端企業も多数立
地している。「京都議定書」の地、環境先進地という
顔も持つが、その根底には京都の持つ豊富な文化芸術
の力が大きく寄与している。

また、日々の暮らしの中で、洗練された文化芸術を
育み、日本人の高い精神性を体現して生活している京

都の人々こそが日本の伝統文化の担い手である。そう
した人々がコミュニティを形成し、営々と守ってきた
地域の伝統文化、地域ごとに特色のある生活文化など
の総体が京都の文化であり、このような住民の手によ
る多様な活動を世界の人々に向けて提示していくこと
も重要な目標である。

さらに、自然との共生、他者との共存の中で発展し
てきた「おおきに」「おかげさま」「もてなし」といっ
た自然や他者に対する敬虔な日本の心を感じてもら
い、持続可能な「定常型社会」^{※2}をめざす21世紀の生
き方のモデルとして世界に貢献していきたい。

※1 伝統文化：「伝統文化」を限定的に定義することは難しいが、本
基本構想では、伝統芸能や茶道、華道など、これまで培われてきた
伝統的な文化芸術を想定。

※2 定常型社会：成長ということを絶対的な目標としなくとも、十分
な豊かさを実現されていく社会。

■ 目標 3. 世界の人々と協働し、新たな創造の潮流を起こす

京都には多種多様な文化芸術に携わる人々の活動が
ある。ここに海外や国内の多くの芸術家、研究者、留
学生等呼び込み、京都の持つ文化芸術の真髄を味わ
い、相互協力し、協働しながらも競い合って創作や研
究や勉強にいそしんでもらう中から、熱気と興奮の渦
が巻き起こるだろう。その坩堝（るつぼ）の中で新し
い文化芸術をダイナミックに創造し、京都文化力プロ
ジェクトにつないでいくのである。このような活動
を通じて京都を世界に向けて大きく広く開くことで、国
内外の若者に京都の素晴らしさを実感してもらうこと

が可能となり、京都の持つ創造力を高め、新しい文化
芸術を創造する有為の次世代の担い手を育てること
になるだろう。そして、世界の人々と文化交流すること
により、異なる文化や多様な階層の人々が混じり合
う中で、誰もが共に生きる社会の構成員となることがで
きる「社会的包摂」[※]が推進されるとともに、ひいて
は世界の平和に貢献できるのである。

※ 社会的包摂：国民一人ひとりが社会のメンバーとして「居場所と出
番」を持って社会に参加し、それぞれの持つ潜在的な能力をできる限
り発揮できる社会の実現に向けて、社会的排除の構造と要因を克服す
る一連の政策的な対応を「社会的包摂」という。

Ⅲ 基本方針

1. 京都文化力プロジェクトの枠組

京都文化力プロジェクトは、文化芸術の領域だけでなく、文化芸術の持つ力を、例えば新たな魅力の発掘による観光振興や、産業振興、地域活性化など、社会の様々な側面に波及させることができるよう工夫するとともに、その後の京都の発展に

貢献するものとしていかねばならない。そこで、京都文化力プロジェクトの推進方策において、「文化芸術の振興」、「地域振興」、「産業振興」、「国際的な課題への対応」、「教育、人材の育成」の5つを観点に効果を波及させることができるように取り組む。

2. 「世界の人々に京都の魅力を伝え、もてなす基盤づくり」に関する推進方策

京都には有形・無形の文化遺産が数多く集積している。しかし、その中には、その存在と魅力が十分に伝わっていないものや、維持、継承が危ぶまれているものも少なくない。これらの遺産を把握し、適切に保存、活用し、未来へ継承することは、京都の果たす役割である。また、近代化の中で、京都に集積している伝統文化を支える後継者が育たず、文化芸術そのものの存続・継承が危ぶまれている。文化芸術の京都らしさの基盤である、有形・無形の文化遺産、伝統文化について、それらを支える人、技、物を含めその価値を再認

識・再発見するとともに、守り、その魅力を発信し、未来につなげていくことが大切である。それは文化のみならず、京都の伝統産業にとっても活性化につながり、産業界の発展を図るものとなる。

また、観光等産業担当、情報担当、景観・都市計画担当など行政が整備主体として取り組むべき部分は、それらの担当が相互にしっかりと連携し、京都全体での息の合った取組とすることが肝要である。また、国等が整備主体となるものについては、本基本構想に基づき、その実現に向けてオール京都で働きかけていく。

1) 京都の人が京都の文化を知り、大切にすること

世界の人々に京都の魅力を伝え、訪れる人々をもてなすためには、何よりも京都に住む人々が京都の文化を知り、大切に守り、育てていく努力が必要であり、そのことを広く認識してもらう活動を展開することが大切である。京都の文化というとき、それは歴史的建造物や伝統的な景観だけでなく、各種の無形文化遺産や京都の人々の日常生活の在り様にまで及ぶものである。京都の人々が京都に住むことに誇りと満足の気持ちを持てるよう、お互いに努力することが求められる。このような京都の人々の日常生活の姿は、必ずや世界中からの来訪者に好ましい印象を与えるであろう。

また、地域に根差した暮らしの文化を通じたまちづくりを推進することが肝要である。例えば、伝統的な「かどはき（門掃）」の習慣等が失われつつある中、美

しい環境を「足下から見直し」、来訪者を迎えるにふさわしい掃除の行き届いた、また花や緑あふれる、清らかさを湛えたまちづくりをめざす。

また、来訪者がこのような文化を知るには、京町家に滞在し、京都の人々の日常生活をつぶさに体験することによって得られるものであるから、各種の体験学習のプログラムを提供することが大切である。

そして、もてなしの文化はもてなす側ともてなされる側が共通の社交作法を持ち得て初めて成り立つことを十分に認識し、異なるマナーや習慣を持つ来訪者に対しても、京都の人々が主導して、日本のマナー・ルールの認識・普及を行う必要がある。このためのコンテンツの作成や教育プログラムの提供を進める。

2) 国内外からの来訪者を迎える環境の整備

京都の文化芸術を支え、未来の文化芸術を担う人材を育成し、文化芸術活動を軸とした人の交流、世界への文化芸術の発信ができるよう、その拠点となる文化施設等、創造環境の整備を進めていくことが重要である。このとき、民間主導の不断の尊い努力により、貴重な伝統芸術活動の場がいくつも維持運営されていることも肝に銘じなければならない。

また、京都は自然と文化、古代から現代に及ぶ多種多様な要素が重なり合う奥の深い場であり、このような魅力のある都市空間は他にほとんどないものであるから、その空間をより美しく保持するよう努めつつ、そこにサイバースペース^{※1}を重ね合わせることで、京都の魅力を一層高めることができるだろう。そのためにも、誰もが安心して訪れることができ

るようユニバーサルデザイン^{※2}の考え方に基づく観光地域の景観の整備や情報基盤の整備等をきめ細かく行っていくことが大切である。

また、京都議定書の誕生の地として、次世代自動車の普及やスマートコミュニティ^{※3}の推進等、環境にやさしい社会の構築に向けた取組を推進し、来訪者を迎えることも大切である。

※1 サイバースペース：コンピュータネットワークなどの電子メディアの中に成立する仮想空間

※2 ユニバーサルデザイン：年齢、性別、能力、国籍などの違いに関わらず、全ての人が安心・安全に利用しやすいようはじめから建物、製品、サービスなどをデザインすること及びそのプロセス

※3 スマートコミュニティ：ICT（情報通信技術）を活用して、再生可能エネルギーの地産地消を推進するとともに、交通システムの最適化やライフスタイルの転換までもめざす社会

3) 文化・観光にかかわる情報の収集、蓄積と提供

世界の人々が京都に関心を持ち、京都を訪れたいようになるように、京都の文化・観光に関わる情報をわかりやすく発信する。京都を訪れたいと思う人々には各人の条件に合った旅行計画や観光ルートを作成できる支援システムや情報の提供、実際の来訪時には行動に必要な実時間情報を必要な時に必要な場所で提供、来訪後

も思い出の整理を支援し、もう一度京都を訪れたいと思わせる新たな情報やイベント情報を提供できる仕組みをつくり、京都ファンのコミュニティを形成していくなど、総合的な情報環境（サイバースペース）を多言語環境で構築していく体制を整えておく必要がある。

4) 外国人への言語対応、災害時対応などの充実

上記のようなことを実現していくためには、特に外国人に対して対応が必要となる。各施設での外国語での案内・説明、禁止事項などの周知、イスラム圏や中国、その他各国の習慣が異なる外国人への対応や、異なる言語の人々への対応を引き受けられる案内・相談

センターの充実が求められる。また病気や事故、犯罪的事件、地震・火事等の災害など、不測の事態が生じた時に素早く対応できるよう、情報システムを充実させるとともに、日頃からそれを実践する準備を整えておく。

3. 「世界の人々への京都の総合的な文化力の提示」に関する推進方策

1) 多様な主体が主催者として参画できるようにする

2020年に向けて、芯となるいくつかのメモリアルなイベント案を提示し、その具体的なアイデアについては実際に文化芸術を支えている専門分野の人々や地域・大学・NPOなどから提案してもらうことにより、求心力や持続性を持って京都の文化力を高めることにつなげる。それは京都の多種多様な文化をいろいろな角度から体験できる経験デザインであったり、また新たな文化創造の地平を開くことであったりもする。

また、文化創造のエネルギーの源であり、文化継承の将来の担い手でもある若者の力、異なる文化のなかで育まれた外国人や留学生らの発想を積極的に採り入れ、その斬新な発想や旺盛なチャレンジ精神を発揮するチャンスもできるかぎり多く設ける。

さらに、京都市をはじめとして府内の各市町村や各分野の団体等においても実行委員会を組織するなどして、2020年に向けた取組を実施するなど、京都全体で京都の文化力を提示する。

そして、それらの多様な立場の人々の力を引き込む

ために、それらの人々が主催者・共催者・協力者等となることも含めて多様なかたちで参画できるよう、実行委員会を組織し広く取組への参画を呼びかけ、提案されるイベント等の事業を整理するとともに、こうした多様な主体が自主的に生き生きと活動できるように、いろいろな面で支援していく。

なお、各イベントの実施にあたっては多くの方々に場所や特技などの提供、資金提供、ボランティア活動の実施協力をお願いするなど、運営・資金面でも多くの府民・市民、多様な主体の参画を求めたい。そのための有効な手段として近年注目されているサイバースペースを用いた手法の活用（不特定多数の方から寄附を募るクラウドファンディング^{※1}の手法や、ちょっとした作業を単発や細切れで依頼するクラウドソーシング^{※2}の手法など）も研究していく。

※1 クラウドファンディング：不特定多数の人から資金を募る手法

※2 クラウドソーシング：不特定多数の人に作業を単発や細切れで依頼する手法

2) 京都府全域を舞台にし、地域振興にも資する

この事業で対象とする文化芸術は多種多様であり、地域も北から南まで京都府全域にわたり、いろいろな「形態・表現」、「見せ方」、「打ち出し方」がありえる。また、その規模、会場も、公共施設をはじめ寺院・神社、自宅、店舗、工房、教室・学校などが考えられ、幅広い領域の多様な手法とそのための“場”が求められる。

京都のいろいろな基盤や資源をフル活用し、世界に

開かれたものにして、「京都府全域にわたるまちじゅうが舞台」となるような取組としていくことによって地域振興につなげていく。そして、実行委員会を中心としてこれらの“場”と“時”をイベントマップ等により情報を束ねて提供するポータルサイトを設置し世界に発信することにより、世界に開かれたものにしていく。

3) 段階的にイベントを実施する

多くの大学や寺院・神社、工房などが存在する京都には、文化を支える産業や技術などへの広がりがあり、歴史的・文化的・学術的資源の蓄積が多くある。2016年から2020年の京都文化力プロジェクトの期間中、毎年段階的にイベントを実施していくことで、2020年に向けた気運の醸成を図る。また、それぞれのイベントに対する反応をみて、文化プログラムの内容が進化・成長するようにする。既に、2017年に京都市において東アジア文化都市の開催が、2019年に

は世界博物館大会の開催が決定しており、このようなイベントとの連携は効果的であろう。

さらに、呼びかけ文に謳われたように、2018年には明治150年、2021年には東日本大震災10周年となることから、京都で日本の近代150年の歩みを振り返り、東北の復興に関連して事業を行うことも意義が深い。2016年に京都でも開催が予定されているスポーツ・文化・ワールド・フォーラムと関連付けて京都文化力プロジェクトをスタートする。

4) 京都文化の良さを失わず、伝統産業の活性化に資する

京都の伝統産業の特徴として、長い伝統の中で小規模ながらも高い品質を守っているという点がある。それらを丹念に拾い上げ、それらの良さを失わないように配慮しつつ、京都文化力プロジェクトのプログラムに組み込んでいくようにする。

例えば、西陣織や丹後ちりめん、京漆器、京焼・清水焼、黒谷和紙、宇治茶、京の酒など京都にしかない日本の伝統的技術の制作現場を体験学習や体験ツアー

で見せることにより、これらの伝統的技術に対する注目や関心が高まり、新たなビジネスチャンスを生み、ひいては後継者の育成にもつながっていくことが期待される。こうした、魅力的な工房などの持つ素晴らしさ、ユニークさを世界に発信し、産業として積極的に育成する施策を行う。また伝統産業を基礎として作られる新しい創造的な産業を積極的に育成し、世界に対して周知していく。

5) 各種イベント情報の提供と保存

この事業で対象とするイベントについては、できる限りリアルタイムでネット上に映像を配信するとともに、その映像をアーカイブし、広く提供することで、サイバースペース上でも京都文化力プロジェクトを開催する。そうすれば、実際に京都を訪れなくとも、映

像を通じて、京都の文化力を知ってもらうことができる。さらには、この映像を見た人が、自らも体験してみたい、触れてみたいと感ずることで、京都を訪れるきっかけとなる。

4. 「世界の人々と協働し、新たな創造の潮流を起こす」に関する推進方策

1) 京都の伝統文化をきちんと伝える

京都の伝統文化は京都の人自身が正しく理解していなければならない、その教育や研究は重要である。伝統文化研究のプロジェクト等を推進するとともに、学校で伝統文化について教育を行ったり、生涯学習の中に制度を作ったり、既存の取組をネットワーク化して提示したりすることにより、大人も子どももきちんと学べる体制を用意していく。また、伝統芸能文化や文化財を今後も保存・継承・創造していくための人材育成

や研究、情報発信を行う必要があり、その拠点として、「国立京都伝統芸能文化センター（仮称）」や国が中心となった文化財の修復、防災研究等の総合的な拠点施設の創設をめざす。

また、伝統文化に親しめる機会を増やすなど、鑑賞者や愛好家の裾野や層を広げることで京都文化の底上げを図っていく。

2) 京都の伝統文化を支える人々の活動の場をつくる

京都ならではの伝統文化は、卓越した伝統的技術を持つ職人や原材料の生産者により支えられているといっても過言ではないが、それが継承の危機に陥っている。新たな継承者を得ていくためには、職人や生産者の仕事が生業として持続発展することが根本であ

る。京都文化力プロジェクトを通じて、これらの伝統的技術に対する世界からの注目が一層高まり、ビジネスチャンスにもつながるような活動の場を提供できるようにする。

3) 伝統を活かした創造を生み出すしかけづくり

伝統文化をきちんと継承し、これを新たな創造につなげるためには、その技法、所作、背景などから正確に把握し、アーカイブなどの形で保存するとともに、

権利関係を整理してこれらの資源を新たな創作活動に利用できるような仕組みが必要である。

4) 国内外の若い芸術家等を呼び込み、坩堝（るつぼ）とする

国内外の若い芸術家等が集えるよう、アーティスト・イン・レジデンスなどの短期・長期の滞在者施設等について情報インフラも含めて整備を進め、京都を世界に向けて大きく広く開き、日本各地の若者、世界各地の芸術家を呼び込む。彼らが京都の人々と交わることで、京都が体現している日本の文化芸術と、国内・世界各地の芸術との交流や協働もしくは競い合いが生じ、その熱気と興奮の渦が坩堝のように巻き起こるこ

とを通じて、京都の持つ創造力をより一層高める。そのためには海外や国内の若い芸術家が京都に来たいと思えるよう、京都全体が世界的な芸術村となる魅力を発信していかなければならない。

また、京都文化力プロジェクトのシンボルとなるイベントも、世界の才能を集め、創造性に富み、熱気に満ちあふれた、世界から評価されるような国際フェスティバルをめざす。

5) 京都文化力プロジェクトへの若者の参加

京都は大学のまちといわれるように大学生の比率が高く、文化芸術系の大学・学部・学科も多く、若い世代の力を活用する土壌が整っている。こうした資源を活かすため、若者たちが自ら京都文化力プロジェクト

を目標にした多様なジャンルの創造活動プログラムをつくり、その成果を発表し、新たな創造活動へと展開していくことができるようにする。京都の若者、大学の活動に期待する。

5. 3つの目標に向けた関係団体等との関係構築

1) 東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会等と京都の取組の関係構築

この取組は、独り京都という一地域の振興をめざすのではなく、基本認識に示したように、日本の有形・無形の文化遺産とところの文化を、そのふるさとともいうべき京都を通して広く世界へ発信しようとするものである。東京などでの同種のイベントと連携した企画を立てるなどして総合的な効果を高めることも有効であろう。

京都文化力プロジェクトの企画立案と実行に当たっては、東京オリンピック・パラリンピック競技大会

組織委員会や日本オリンピック委員会（JOC）、日本障がい者スポーツ協会、日本パラリンピック委員会（JPC）、東京都、国などとの連携協力関係をしっかりと構築し、日本各地の取組も牽引しつつ、国全体としての企画運営や情報発信が戦略的・効果的に行われるよう不断の働きかけを行う。

また、関西広域連合等でも検討・取組が進められており、関西広域での連携も図っていく。

2) 府市の関係部局・関係団体の協力

京都文化力プロジェクトがめざす3つの目標の実現に当たっては、京都府、京都市ともに既に個別の計画があり、その目標設定や検討課題、技術的な研究課題も輻輳しているが、文化のみならず、観光、情報インフラ、都市環境などの整備に関係する府市の部門などが常に連携しつつ取組を進めるとともに、既存事業の効果的な活用や企業をはじめとした行政以外の実施主体の取組を促進する支援を検討するなどして京都文化力プロジェクトをリードしていく必要がある。中でも、京都市は、平成15年から景観、伝統、文化をはじめ京都の魅力を守り、育て、大切に未来に引き継ぐ「国家戦略としての京都創生」※を進めており、この取組

の推進にあたって関係する部分が多いが、先頃、「京都観光振興計画2020」（2014年10月）、「京都文化芸術プログラム2020」（2015年2月）を相次いで策定するとともに、「新景観政策」（平成19年9月～）による取組を進めており、こうした取組とも整合性を取りながら、さらに京都商工会議所、企業、大学、その他各種団体とも、お互いに連携し合って最も効果のある方策を取れるようにしていくことが大切である。

※ 国家戦略としての京都創生：世界の宝、日本の貴重な財産である歴史都市・京都の有する自然、都市景観、伝統文化などを、国を挙げて再生し、活用することにより、国が推進する歴史・風土に根ざした国土づくりや観光交流の拡大、文化芸術振興、国際社会への発信を実現する取組

IV 事業構想

1. 基本事項

名 称	京都文化力プロジェクト2016ー2020 Kyoto Festival 2016-2020 or Kyoto “Power of Culture” project ※ただし、国が推進する文化プログラムの名称に合わせて調整する。
期 間	2016年-2020年 2016年の文化・スポーツをテーマにしたスポーツ・文化・ワールド・フォーラムを、キック オフ事業とする。
会 場	京都府全域
事業主体	行政、経済団体、文化芸術団体・文化施設、観光関連団体、大学、住民団体 等

2. 事業内容

京都で文化イベントの実施を考えるにあたっては、既にある伝統的な行催事の圧倒的な存在感を念頭に置く必要がある。これらの行催事や芸能がいかにして連綿と受け継がれ、今日なお存在意義を保ち続けているのか、その生成のリアリティを解き明かすとともに、現代に存在する解釈を考えることが、さらに将来へつながる手だてのひとつである。既に途絶えたり、忘れ去られたものもあり、その復活の試みには膨大なエネルギーを要する。伝統を連綿と受け継いでいくためには、そこに新たな解釈や意義を与え、伝統から創造、革新を生み出し、支持を得続けることが重要である。

今回の京都文化力プロジェクトは、各分野の専門家・担い手による、新しい視点からの伝統文化に対する現代的な解釈や読み直しが行われる重要な契機ともしたい。

一方、伝統や古典というものを正確に記録・保存し、随時再現するために、情報技術の活用が考えられる。早期にアーカイブ化を進めなければその貴重な財産を活かし解釈し直す機会が永遠に失われてしまう可能性がある。伝統の継承の方策のひとつとして、情報イン

フラの活用は有効である。

また、京都文化力プロジェクトで開催するイベントの多くが、伝統を踏まえ、既存の数多くの行催事との共存の中で企図されることになるが、両者の情報を合わせみる手段としても、情報インフラが有効である。

様々な伝統文化の有り様と、新たな解釈でのイベント、現代のテクノロジーで記録され蘇るそれらを融合して、京都文化力プロジェクトの事業を考えたい。

こうした取組を推進する前提として、伝統文化の継承と新たな文化の創造の営みを着実に実践する必要がある。そのためには、環境・景観、交通・情報、各種の都市施設などのインフラを整備し、安心・安全、健康、利便性、快適性等を確保することによって、文化・芸術・技術・学問の継承と発展を可能にする創造的な都市・地域を形成することが重要な課題となる。また、世界中の多くの人々がそのような奥深い京都の文化芸術の魅力に触れることができるようにするためには、快適な受け入れ環境を整備し、まちとしての質を高めることが不可欠である。

1) インフラ整備

- ① 京都の文化財の保全への努力
- ② 京都全体にわたる観光地域の整備
- ③ 情報システムの整備

- ④ 京都に整備されることがふさわしい国立施設等の誘致

国立京都伝統芸能文化センター（仮称）、国立デザイン工芸美術館、国立京都歴史博物館（仮称）、国が中心となった文化財の修復や防災研究等の総合的な拠点、ユネスコ創造都市研究所の誘致

2) イベント計画

＜京都文化力プロジェクトの中心として考えられるテーマの例示＞

以下に例示するものはあくまでもテーマ、あるいは課題であり、具体的な事業は実行委員会で詳しくデザインされる必要がある。その際には、イベントアイデア募集や府内各地でのワークショップ等で寄せられた数多くのアイデア等も踏まえ、内容を豊かなものにしていく。

- ① 伝統文化×現代芸術 京からオリンピックを祝う事業

- ・オリンピックの開催を喜ぶ気持ちを表すため、世界から京都を訪れる人々と府民・市民が京都文化を楽しむ「宴」を開催
- ・アート展示、音楽、いけばな、能・狂言、舞踊、インスタレーションなどのコラボレーションや、文化施設の回遊など京都らしい催し

- ② 京のまちじゅう博覧会

- ・国公立4館が連携した京の至宝の一斉公開や、博物館・美術館、寺院・神社、庭園、伝統産業の工房や老舗店・旧家等の所蔵品公開

- ③ 京のまちじゅう舞台

- ・楽劇、演劇、舞踊、伝統芸能などの舞台芸術や、誰もが参加できる「踊りまくり」イベント

- ④ 寺院・神社等で文化発信拠点事業

- ・寺院・神社等の境内で、伝統的な行催事の復興などによる新たな集いの発信

- ⑤ 京のもてなし一茶の湯・いけばな・和食 等

- ・まちじゅうでのお茶のおもてなしや、京料理をはじめとする和食や京菓子、いけばなも多くの人々に楽しんでもらう

- ⑥ 日本の文化・学術などに関するシンポジウム等

- ・明治維新150年、京都学、源氏物語などをはじめ日本のアカデミックな魅力を京都から伝える学術系イベント

- ⑦ 多様な実施主体が京都の文化の底力をみせる事業

- ・先端産業、障害者の芸術、京都の北から南まで豊かな自然や永い歴史に培われた海・森・お茶の京都、日本遺産 等

- ⑧ 未来に広がる新京都文化

- ・未来につながる府民・市民から全く新しい提案の出現を期待

V 推進計画

1. 実行委員会の立ち上げと体制

1) 実行委員会の取組への参画呼びかけ

基本構想に基づき、構想に盛り込まれた事業を具体化していくための組織として、行政、経済団体、文化芸術団体・文化施設、観光関連団体、大学、住民団体等からなる実行委員会を組織し、推進委員会を実行委員会へと改組する。

基本構想の下にさまざまな事業主催団体が参集できるよう、実行委員会の取組への参画を積極的に呼びかけるとともに、企画される多数のイベントが円滑に調整・統合され一つの祭典として全体が形成されるよう、実行委員会で横串を通していく。

2) 実行委員会の組織体制

基本構想には、自ら事業主体となってイベント等を企画立案・実施していく部分と、インフラ整備のように他の実施主体にその推進を働きかける部分があるが、イベント等については、新たに企画運営委員会を内部に置き、直営事業の実施や広報活動に取り組むとともに、クラウドファンディングやスポンサー企業とのマッチング、協働または連携実施主体等との橋渡しなど、個別の各事業実施団体の取組を支援するための仕組み作りなど、イベント実施に必要な条件を整えていくとともに、各事業間の連携や調整を行い企画される多数のイベントに横串を通して、日程・会場等が有機的に設定されるよう調整していく。

総合的な文化事業である京都文化力プロジェクトが

成功するためには（プロジェクトの顔ともいうべき）総合監修者（イベント全体をコンセプトから統括する芸術監督）とプロデューサー（財源調達も含めて事業の枠組みを決定し、運営全体を統括する責任者）とが必要であり、これらを早期に選定・依頼する必要がある。また、個別のジャンルや事業を切り盛りするプロジェクトマネージャーが必要となろう。特にプロジェクトマネージャーには、若い人材の活躍の場となることをめざしたい。

インフラ整備には、行政が実施主体の中心となるものもあるが、オール京都で効果的な要望活動等を行う等、実行委員会として整備の進捗に支援協力する。

3) 理事会

京都の各界の代表者による理事会を設置し、重要事項を決定する。

4) 企画運営委員会

事業全体の実施計画の立案や関係機関との調整を行う企画運営委員会を立ち上げるとともに、必要に応じて専門部会などを設置できるものとする。とくに実施

計画を策定するため、企画運営委員会と一体となって検討する実施計画策定部会を早期に設置する。

5) 会員

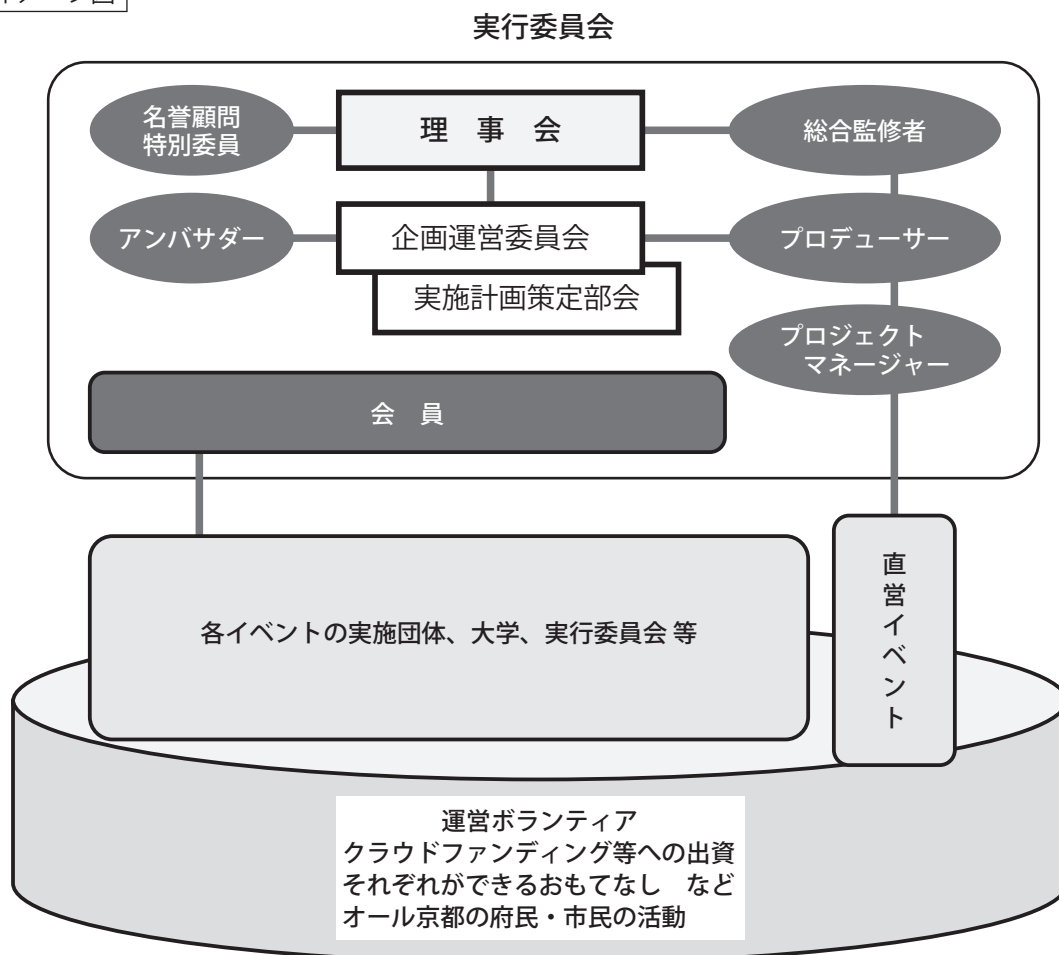
京都の北から南まで、また京都内外を問わず、広くその趣旨に賛同する団体・企業等からなる会員を募り、参画できる仕組みを検討することが必要である。

6) 事務局

実行委員会の事務局は、京都府、京都市、京都商工会議所の三者共同で設置運営するものとする。イベント

事業は専門の事業者へ委託し、責任を持って事業推進を行わせることが必要である。

体制イメージ図



2. 広報計画

1) 国内外に向けた情報発信

日本はもとより世界の人々に、東京オリンピック・パラリンピックを契機に、4年間を通して、スポーツだけでなく「もう一つの感動」を味わうために京都へ

行こうと思っていただけるよう、同組織委員会と連動し、広報効果で最大化を狙う。

2) 統一シンボルマーク・ロゴマーク等の設定

多様な実施主体による多彩なイベントが、一つの旗印の下に、大きな祭典を形成して見えるよう、関連するさまざまな情報を系統的に整理し、最適化し、束ね、

提供できるようにする。このため、統一シンボルマーク・ロゴマーク等の設定などの取組を行う。

3) ポータルサイトの運営

全世界に向けて情報発信するため、ウェブ上に京都文化力プロジェクトのポータルサイトを開設し、祭典に関するあらゆる情報がここへ集まるようにする。検索しやすいドメインを工夫し、京都を発信する様々な

サイトとのリンクを歓迎する。また、SNSほか今後現れるかもしれない新たな技術も含めた多様で機動的な情報発信ツールを活用する。

3. 財源の確保

事業の充実のためには財源の確保が重要である。公的な財源にあわせて各種団体や民間からの資金の提供を図る必要がある。そのためには、従来のような文化イベントへの企業協賛という枠をこえて、例えばまちづくりや文化芸術という領域への企業の投資がビジネスチャンスであるといったような認識ができるよう、

事業の位置づけも考えられるようにする。また個々の事業でクラウドファンディング等により府民・市民、国内外の人々からも資金提供ができるような手法を設定し、事業への参加を促し、盛り上がりをつくっていく。

京都文化フェアの呼びかけ

文化芸術は、人々の創造性を育み、表現力を高めるとともに、心の絆を深め、相互に理解し尊重し合い多様性を受け入れる心豊かな社会の形成に寄与するものである。

「スポーツと文化の祭典」であるオリンピック・パラリンピック競技大会が、2020年に東京で開催されることは、我が国のスポーツだけでなく文化芸術の更なる発展にとってもまたとない機会をもたらすであろう。この晴れやかな祭典を契機として人々は文化芸術の持つ様々な可能性を再認識するとともに、文化芸術をより身近なものとして実感できるようになるはずである。

京都は、これまで先人が積み上げてきた伝統とその上に絶えず新しい文化を培ってきた、日本文化の心のふるさとである。いのち輝く文化都市・京都は、その持てる文化の力を最大限に発揮し、併せて京都の持つ古今東西にわたる文化融合の可能性を世界に知らしめるとともに、21世紀日本の文化首都として新しい文化の創造と、次代への継承に向けて、不断の努力を傾注しなければならない。

1964年10月10日、東京・神宮の杜の上空に広がっていた抜けるような青空は、「戦後復興した現代日本」の象徴として記憶されている。そこで重要なのは、この復興の「現在」イメージが1964年の東京オリンピックだけでなく、1968年の明治百年とそれを契機とした歴史ブーム、1970年の大阪万国博覧会という「過去」や「未来」に目を向けた国民的イベントと一体として記憶されたことである。

私たちはこの国民的成功をふまえ、京都で日本の近代150年の歩みを振り返った上で（明治150年・2018年）、2020年の東京に呼応した「京都文化フェア」に臨むことを提案する。そしてその先には未来に向けた取組が復興の記念をめざし東北で展開されるべきだ考える。歴史を回顧しつつ助走を始め、オリンピック・パラリンピックを跳躍台として、新しい日本社会の未来像を描くことが不可欠なのである。

今日の日本社会をとりまく状況は、50年前より遥かに難しい。東日本大震災の復興も道半ば、東京一極集中は進み、少子高齢化に閉塞感が漂っている。それを打ち破る国民的イベントが歴史と伝統を誇る京都からスタートすることの意義は極めて大きいといえるだろう。京都は明治維新の舞台となりながら、維新によって首都ではなくなったが、千年の「みやこ」文化を守り抜き、独自の先端的産業を開花させ、世界の学知を集めて、今日では文化首都と称されるまでの地位を築いてきた。

オリンピックでは世界の注目が日本に集まる。世界に向けて日本の文化を発信し体感してもらうまたとない機会である。京都が先がけとなって、日本文化の真髄と、日々の生活に根ざした日本人の深い精神性に基づく日本の文化を世界に向けて発信していかなければならない。と同時に、私たちは、これからの日本の文化を担う若者たちの湧き上がってくる新しい創造の息吹を積極的に受容し、誰もが気軽に楽しめる多彩な文化の祭典へと結実してほしいと願っている。

そのためにも、内外の多くの方々―個人・団体・企業・行政機関が、この意義を深く理解し、またこれに賛同して、多彩な記念の取組を展開されんことを期待する。

平成26年 8月18日

梅原 猛
坂田 藤十郎
千 玄室
山中 伸弥
冷泉 貴実子

委員名簿等

「京都文化フェア呼びかけ」に基づく推進委員会委員名簿（五十音順）

◎委員長 ○副委員長 ☆ワーキング座長（平成28年3月28日現在）

委員名	所属・役職
赤 松 徹 眞	（公財）大学コンソーシアム京都理事長
荒 巻 禎 一	（公財）京都文化財団理事長
在 田 正 秀	京都市教育長
有 馬 頼 底	京都仏教会理事長
池 坊 専 好	華道家元池坊次期家元
井 上 八千代	京舞井上流五世家元
沖 田 康 彦	京都府商工会連合会会長
柏 原 康 夫	（公社）京都府観光連盟会長／（公社）京都市観光協会会長
門 川 大 作 ○	京都市長
金 田 章 裕	元人間文化研究機構長
佐々木 丞 平 ☆	京都国立博物館長／独立行政法人国立文化財機構理事長
佐々木 雅 幸	文化庁文化芸術創造都市振興室長（通称：文化庁関西分室）
潮 江 宏 三	京都市美術館長
汐 見 明 男	京都府町村会長
白 石 方 一	京都新聞ホールディングス社長
千 宗 室	茶道裏千家家元
立 石 義 雄 ○	京都商工会議所会頭／京都府商工会議所連合会会長
建 畠 哲	京都芸術センター館長、多摩美術大学学長
田 中 恆 清	京都府神社庁長
寺 井 友 秀	NHK京都放送局長
中 山 泰	京都府市長会会長
長 尾 真 ◎	（公財）京都市音楽芸術文化振興財団理事長、元京都大学総長
畑 正 高	京都府教育委員会教育長職務代理者
松 浦 晃一郎	明日の京都文化遺産プラットフォーム会長
松 本 紘	国立研究開発法人理化学研究所理事長、前京都大学総長
村 井 康 彦	国際日本文化研究センター名誉教授
村 田 純 一	（公財）京都文化交流コンベンションビューロー理事長
柳 原 正 樹	京都国立近代美術館長
山 田 啓 二 ○	京都府知事
渡 邊 隆 夫	京都伝統工芸産地協会会長

「京都文化フェア呼びかけ」に基づく推進委員会 ワーキング会議委員名簿

(平成27年 5月18日現在)

氏 名	役 職 等	備 考
(座長) 佐々木 丞 平	京都国立博物館館長	推進委員会委員
金 田 章 裕	元人間文化研究機構長	推進委員会委員
太 田 達	(公財)有斐斎弘道館代表理事	
後 藤 和 子	摂南大学経済学部教授	
才 寺 篤 司	京都商工会議所産業振興部長	
佐 藤 卓 己	京都大学大学院教育学研究科教授	
杉 本 節 子	(公財)奈良屋記念杉本家保存会常務理事兼事務局長、料理研究家	
高 橋 信 也	森ビル株式会社顧問兼森美術館顧問	
平 竹 耕 三	京都市文化芸術政策監	
美 濃 導 彦	京都大学学術情報メディアセンター教授	
森 下 徹	京都府文化スポーツ部長	
門 内 輝 行	京都大学大学院工学研究科教授	
吉 澤 健 吉	京都産業大学文化学部教授	

基本構想策定までの経過

平成25年 9月	東京オリンピック・パラリンピックの開催決定 知事と京都市長との懇談会で合意
26年 8月	京都文化フェア呼びかけ
10月	第1回推進委員会開催
27年 1月～5月	ワーキング会議開催(4回)
27年 7月	第2回推進委員会開催
9月	基本構想中間案公表
～12月	イベントアイデア募集
	ワークショップ開催(3回/京都市・宇治市・綾部市)
28年 3月	第3回推進委員会開催 基本構想策定



京都文化フェア呼びかけの様子



推進委員会の様子

Ⅲ 基本方針

2. 「世界の人々に京都の魅力を伝え、もてなす基盤づくり」に関する推進方策

2) 国内外からの来訪者を迎える環境の整備 に関する事項

京都の文化芸術を支え、未来の文化芸術を担う人材を育成し、文化芸術活動を軸とした人の交流、世界への文化芸術の発信ができるよう、その拠点となる文化施設等、創造環境の整備を進めていくことが重要である。このとき、民間主導の不断の尊い努力により、貴重な伝統芸術活動の場がいくつも維持運営されていることも肝に銘じなければならない。

また、京都は自然と文化、古代から現代に及ぶ多種多様な要素が重なり合う奥の深い場であり、このような魅力のある都市空間は他にほとんどないものであるから、その空間をより美しく保持するよう努めつつ、そこにサイバースペース^{※1}を重ね合わせることによって、京都の魅力を一層高めることができるだろう。そのためにも、誰もが安心して訪れることができるようユニバーサルデザイン^{※2}の考え方に基づく観光地域の景観の整備（歴史的な建造物等の計画的修理、無電柱化等）や情報基盤の整備等をきめ細かく行っていくことが大切である。

また、京都議定書の誕生の地として、次世代自動車の普及やスマートコミュニティ^{※3}の推進等、環境にやさしい社会の構築に向けた取組を推進し、来訪者を迎えることも大切である。

※1 サイバースペース：コンピュータネットワークなどの電子メディアの中に成立する仮想空間

※2 ユニバーサルデザイン：年齢、性別、能力、国籍などの違いに関わらず、全ての人が安心・安全に利用しやすいようはじめから建物、製品、サービスなどをデザインすること及びそのプロセス

※3 スマートコミュニティ：ICT（情報通信技術）を活用して、再生可能エネルギーの地産地消を推進するとともに、交通システムの最適化やライフスタイルの転換までもめざす社会

- ① 歴史的な建造物等の計画的修理：指定・登録文化財の公開に向けた大規模な改修など
- ② 文化芸術関係施設等創造環境の整備：京都府立総合資料館・国際京都学センターの整備、ロームシア

ター京都の再整備、京都市美術館の再整備、京都市立芸術大学の移転整備、京都府立植物園の整備、京都市動物園の再整備など

- ③ 文化・地域資源の鑑賞のための基本インフラの整備：宿泊施設やレストラン、喫茶店、免税店などの商業施設の充実、交通手段の整備、案内表示等の多言語化の推進
- ④ 文化・地域資源の鑑賞環境の整備：美術館、博物館、寺院・神社、文化的景観等の内容説明資料や案内の多言語化等鑑賞しやすい環境の整備。また、多種多様な文化・地域資源を相互に連携させ、来訪者に京都の魅力を体感することができる総合的なサービスの提供
- ⑤ 自然と共生する環境やライフスタイルの継承・創出：豊かな自然と共生する環境やライフスタイルを継承・創出するとともに、その価値を世界に向けて発信
- ⑥ 徒歩や自転車による観光を中心とした整備：京都を歩いて楽しむための道や推奨観光ルートの整備、国内外からの来訪者にも自転車の走る場所が分かる自転車走行環境の改善、案内標識の改善・多言語化、手荷物預かりサービスの充実、公共交通の利便性の向上
- ⑦ 自然を楽しむハイキングコースの整備：優れた自然の風光に恵まれた多くの気持ちの良いハイキングコースを、よりよく整備。また、世界からの来訪者も気楽に散策できるように案内標識などを多言語で整備
- ⑧ 情報基盤の整備：来訪者がサイバースペースの文化・観光情報に必要なに応じて利便性よくアクセスできる無線LAN（Wi-Fi）環境の整備。加えて、来訪者や交通利用状況等を逐次把握できる通信環境整備についての研究・検討

III 基本方針

2. 「世界の人々に京都の魅力を伝え、もてなす基盤づくり」に関する推進方策

3) 文化・観光にかかわる情報の収集、蓄積と提供 に関する事項

世界の人々が京都に関心を持ち、京都を訪れたいようになるように、京都の文化・観光に関わる情報をわかりやすく発信する。京都を訪れたいと思う人々には各人の条件に合った旅行計画や観光ルートを作成できる支援システムや情報の提供、実際の来訪時には行動に必要な実時間情報を必要な時に必要な場所で提供、来訪後も思い出の整理を支援し、もう一度京都を訪れたいと思わせる新たな情報やイベント情報を提供できる仕組みをつくり、京都ファンのコミュニティを形成していくなど、総合的な情報環境（サイバースペース）を多言語環境で構築していく体制を整えておく必要がある。

① ポータルサイトの構築

誰もが自由にアクセスし活用しやすいよう、ポータルサイト（インターネット上で情報を探し出す基点となるウェブサイト）をつくるとともに、京都の持つあらゆる文化芸術資源の情報を収集してひとまとめにして保存するアーカイブセンターを作る。すでにサイバースペースにある様々な京都情報もアーカイブとして収集し、ポータルサイトにリンクするなどして活用し、多くの人に関与できる仕組みを作っていく。文化芸術や京都の暮らしなどのコンテンツ映像はバーチャルリアリティの技術を活用してわかりやすく、魅力的に発信していく。また、京都を訪れた外国人は、京都以外の場所も訪問すると考えられるので、奈良その他関西各地の観光情報とも密接なリンクを張り、関西各地の観光が快適にでき

るように配慮する。これは、2020年に向け、なるべく早い時期に着手し、京都の魅力をあらゆる角度から世界に発信して、京都文化力プロジェクトへの誘客につなげる必要がある。

② 個人に応じた旅行計画作成支援

京都にはいろいろと観るべきものが多いので、来訪者の希望に応じることができるよう各種の観光プログラムや推奨観光ルートなどを設定する。これらの情報に基づき、来訪者の希望に沿った形で観光ルートを組み立てる対話型観光案内ソフトシステムをPC（パソコン）だけでなくスマートフォンなどにも提供できるようにする。

③ 来訪者に街の実時間状況を提供

交通の混雑状況や施設の入場待ちの時間、観光資源の状況（桜や紅葉の状況）等のリアルタイム情報を収集・発信できるようにするとともに、これらの情報を無線LANを介して受信できるようにする。また、災害時には街の状況や避難所の情報が得られるようにして、誰もが安心して観光できるようにする。

④ 来訪者に今見ることのできないものを仮想的に提供

京都の様々な観光資源、景観、暮らしの文化等を再現した映像コンテンツを制作し、現在の街に重ねて表示するミックスド・リアリティ技術を用いて、場所に応じて提供する。これにより、例えば四条通でいつでも仮想的に祇園祭を見ることなどができるようになる。

IV 事業構想

2. 事業内容

1) インフラ整備 に関する事項

① 京都の文化財の保全への努力

京都には数多くの有形・無形の文化遺産が存在するが、これらが火災や地震などの不慮の災害にも保全が保障されるよう種々の方策を講じるとともに、盗難や保全環境の経年劣化にも配慮するなどの努力が組織的になされることが大切である。文化財の修復、防災研究等の総合的な拠点の設立が求められる。

また無形の文化遺産については、その後継者の積極的な育成と産業や商業利用の資源化を考慮し、京都の活性化につなげていくことにも意を用いるべきであろう。

② 京都全体にわたる観光地域の整備

● 案内表示など受入環境の整備

国内外から訪れる人々をもてなす受入環境の整備（景観、交通、都市整備、宿泊施設など）について、その実施主体による一層の推進をお願いしたい。特に、外国人に対する案内表示（道路や観光地の各種施設等）の多言語化と日常生活が妨げられないための推奨観光ルート設定は急がれる。

● 京都観光を安心して楽しめることができる環境整備

来訪者が京都観光を安心して楽しむことができるよう休憩所、トイレなどを配備し、万一の事故などを想定し、交番・救護施設・病院などへの連絡が簡単にできるよう各種の通信手段を講じる。特に、災害時の観光客の安全性の確保なども日頃から備えるべき重要な課題といえる。

また、交通手段として自転車を活用できる走行環境の整備や自転車と歩行者の交通ルールの普及を推進していく。

● 新たな観光需要を掘り起こすルートなどの整備

自転車移動を好む外国人来訪者のニーズに応えたルートの選定、エコ環境を意識した電動自転車等による観光スポット巡り、周辺のハイキングコースの整備、免税品店の増設など、新たな観光需要を掘り起こすアイデアや実践にも研究の余

地がある。

● 無線LAN環境の整備

情報インフラとしての無線LAN環境の整備を通信事業者の協力を得て進め、来訪者がサイバースペースにアクセスできる環境を整備する。整備にあたっては設定される推奨観光ルートが優先的に表示されるように協議する。また、まちの実時間状況を把握するためのセンサ等の設置許可や運用のルール等を設定し、事業者が協力できる体制を作っていく。

③ 情報システムの整備

● 来訪者に対する利便性の向上の検討

無線LANは設置業者ごとに異なる認証システムが適用されており、まちの中に複数の業者の無線LANが混在する状況は、来訪者にとって不便である。認証システムの連携による簡素化・一元化を行い、安全性やプライバシーの保護に配慮したうえ、来訪者の利便性の向上につなげる方策を、国の展開や対応に留意しながら議論する必要がある。

● 文化・観光情報を収集、蓄積、発信するためのポータルサイト

文化・観光に関する情報を収集する方法、著作権などの権利問題の検証、収集したデータを蓄積する形式や方法、有用で信頼性の高い既存のサイトの選定とリンク設定の調整、情報発信のために集めた情報をわかりやすく提示する方法等を議論し、実行委員会ポータルサイトを構築していく必要がある。

● 文化・観光情報のコンテンツ化、アーカイブ化

すでにデジタル化されているものは積極的に活用するが、まだデジタル化がされていない多くのコンテンツが存在する。どれを選定し、どのようにデジタル化していくかは、実施主体も含めて議論が必要になる。選定されたものを来訪者や府民・市民にわかりやすい形でコンテンツ化するが、持

ち主のわからない貴重な文化財や埋もれたコンテンツが見つかることもあり、ルールを決めて積極的に対応していく必要がある。

- サイバースペースでの京都のまちづくりのためのドメインの工夫

文化・観光情報は地理的空間に配置され提供されるのがわかりやすい。来訪者が投稿する情報も位置に関係づける方がわかりやすい。これはサイバースペースに京都のまちを作ることで実現できる。サイバースペースでの京都のまちを現実と重ね合わせていくデザインが重要であり、そのためにドメインをうまく活用する等、工夫していくべきである。

- クラウドファンディングとクラウドソーシング
クラウドファンディングでは、どのような企画をするのか、お金がどのように使われるのか、使われたのか等の情報を寄付者に提供する必要がある。このような仕組みはクラウドプラットフォームにあるが、提供する情報をどう作るのかが重要になる。また、クラウドソーシングにおいては、多くの人々（府民・市民を想定）が応募してくるよう協力者コミュニティなどの仕組み作りが大切である。応募してきた人の中で誰に仕事を頼むのかの選択、お金の支払い方法などが問題になり、このあたりに留意しながら、みんなで支える事業の実現手法のひとつとして議論していく必要がある。

④ 京都に整備されることがふさわしい国立施設等の誘致

- 国立京都伝統芸能文化センター（仮称）の誘致
京都に集積されている日本の伝統芸能を生み出してきた人・物（作品）・場を国内外の人々に情報発信し、更に体験・体感してもらうとともに、日本の伝統的な文化芸術を継承・創造するための

拠点として「国立京都伝統芸能文化センター（仮称）」の創設を強く働きかける。

- 国立デザイン工芸美術館の誘致
日本におけるデザインの重要性や、ヨーロッパのデザインの源にもなった日本のデザインの歴史、建築やプロダクト、ファッションなどの様々な分野での現在のデザインの紹介など、日本のデザインとものづくりの魅力と意義を伝えることを目的とした、文化庁長官らが提唱する「国立デザイン美術館」の京都における設置を強く働きかける。
- 国立京都歴史博物館（仮称）の誘致
1200年の都市としての歴史・記憶を活かして、日本の歴史・文化を総合的に理解でき、日本の文化力を世界に発信する「国立京都歴史博物館（仮称）」の創設を強く働きかける。
- 国が中心となった文化財の修復、防災研究等の総合的な拠点の創設
京都は日本が文化立国であるための基盤を支えている。文化財はその大きな柱となるものであるが、修復、人材育成、防災研究、アーカイブ等の各分野で指導的役割を果たす必要がある。その拠点として国が中心となった文化財の修復、防災研究等の総合的な拠点の設立が求められる。
- ユネスコ創造都市研究所の創設
京都の世界的なプレゼンスを高めるためには、国立施設だけでなく世界規模の施設、例えばユネスコが進める創造都市事業（文化芸術の持つ創造性を活かした産業振興や地域活性化に取り組む都市）に必要なシンクタンク機能を担う研究所（世界的な視野で経験を理論化し、政策や人材の研修を担う組織）の創設を、国とともにユネスコへ働きかけるといったことも有効であろう。

IV 事業構想

2. 事業内容

2) イベント計画 に関する事項

2016年-2020年の期間、府市や経済界、その他各種団体が中心となってイベント実行委員会を作り、毎年あるいは年次的な国際的文化芸術フェスティバルを開催し、京都文化力プロジェクトの主要な取組とする。

実行委員会が直接実施する事業は、京都の特徴や蓄積を活かし、基本方針で述べたように、多彩な主催者が府内の「まちじゅうを舞台」として質の高い取組を多数展開していけるよう、シンボリックかつ関連事業などの裾野の広いテーマとすることが必要である。こ

れらの事業は特に周到な準備をするとともに、世界に対して積極的な働きかけを行い、京都のイベントが世界から注目されるよう努力することが大切である。また、誰もが鑑賞・参加することができるようユニバーサルデザインの考え方に基づく取組を展開することも大切である。

なお、テーマによっては東京でのイベントと連携協力して開催する企画を立てるのも有効であろう。

京都文化力プロジェクトの中心として考えられるテーマの例示

以下に例示するものはあくまでもテーマ、あるいは課題であり、具体的な事業は実行委員会で詳しくデザインされる必要がある。その際には、イベントアイデア募集や府内各地でのワークショップ等で寄せられた数多くのアイデア等も踏まえ、内容を豊かなものにしてい

① 伝統文化×現代芸術 京からオリンピックを祝う事業

まず、2016年に京都でも開催される予定のスポーツ・文化・ワールド・フォーラムをキックオフ事業として、フォーラムに来られる方々に京都の魅力を伝えられるよう、京都の力を結集して、取り組んでいきたい。

その上で、2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催をまずもって祝い、喜ぶ気持ちを表すため、世界から京都を訪れる人々と府民・市民が京都文化を楽しむ「宴（うたげ）」を開催したい。

例えば、参加者にはできるだけ和装を装ってもらい、様々なアート展示、音楽、いけばな、能・狂言、舞踊、インスタレーション[※]などのコラボレーションやトークなどのイベント、文化施設等の回遊等で楽しむことができれば、伝統文化と現代芸術が幾重

にも重なり混ざり合って、京都ならではの催しとなり、多くの人々がこの京都文化力プロジェクトに参加することができる。さらにかつて時代の空気を先導した「京童部」や「かぶき者」から受け継ぐ平安京のDNAを呼び覚ますような面白い企画が生まれれば、京都でしか楽しめない特別な宴となる。

また、視覚的にアピールするため、世界的、かつ画期的な現代芸術作品を京都の新たな（期間中のあるいはより長期的な）ランドマークの一つとなることを期して設置するといったことも考えられる。

作品の制作にあたっては、京都に滞在して、京都の芸術家や伝統芸術の職人などと交流・協働するなどして、京都に関わる表現をした作品を発表してもらうようにし、基本方針4-4)に記述の「埴塙」を誘引する取組となればよい。

[※] インスタレーション：美術作品の展示方法のひとつ。展示空間の壁や床に、空間と有機的な関係を持つよう立体作品を設置する方法

② 京のまちじゅう博覧会

かつて、京都の優れた工芸品は「京もの」として全国に伝えられたが、今なお京都のまちの中に多数収蔵・保存されている。

国立博物館をはじめとする公私立の博物館・美術館が多数あり、寺院・神社の宝物館、庭園、大学の

博物館、企業のコレクション、ユニークなギャラリー、伝統産業の工房、老舗店や旧家の家宝など、京都はお宝の宝庫である。マンガ・ゲームなどの新しい文化資源も揃っている。文化発信の地としての京都をアピールするために、これらの持ち主が連携し、歩調を揃えてその至宝をそれぞれが公開すれば、たちまち京都じゅうが展覧会場となるだろう。

これらまちじゅうの美術館等を牽引する取組として、京都国立博物館、京都国立近代美術館、京都市美術館、京都文化博物館の4館（京都ミュージアムズ・フォー）が連携して京の至宝を一斉公開する展覧会を開催してもらうとともに、京都市内博物館施設連絡協議会に加盟する博物館をはじめ、趣旨に賛同する美術館等の参加を募り「京のまちじゅう博覧会」としてデザインし、広報するといった情報発信の仕方も考えられる。

また、2019年に京都で開催される世界博物館大会との連携を図る。

③ 京のまちじゅう舞台

16世紀、室町時代後半から京の町衆によって盛んに催された風流踊りは、全国各地に伝わり様々な芸能を生み出すとともに、江戸時代以降の盆踊りの原型ともなっている。風流踊りは安土桃山時代にいよいよ盛んになり、江戸時代に入るとやがて衰えたが、その最盛期の熱狂が豊臣秀吉の七回忌として開催された「豊国大明神臨時祭礼」（1604年）屏風絵などにより伝えられている。京都文化力プロジェクトを熱く盛り上げるためには、京のまちじゅうを舞台としたパフォーミングアーツ（舞台芸術）の開催が必要であり、例えば、能、狂言をはじめとする楽劇、演劇、舞踊などの舞台芸術は、様々な実施主体により日程や会場を棲み分けながら行われていくことになるが、これら一連のパフォーミングアーツの皮切りとして「風流踊り」にちなんだ、誰もが参加できる「踊りまくり」イベントの企画も考えられる。かつての町衆による「風流踊り」の再現から、各地域で受け継がれてきた踊り、さらにはコンテンポラリーなダンスまで、様々なダンスパフォーマンスを山城から丹後まで府内各所で行うなどの企画であれば、①のオリンピックを祝う事業にあわせての実施も考えられる。

④ 寺院・神社等で文化発信拠点事業

寺院・神社は京都の象徴的存在であり、日々の信

仰の場であるが、祭礼には地域コミュニティの総力が結集され、またコンサートなど今日的な文化発信も多様に行われている。かつては勧進興行などの催しが度々行われ、多くの民衆を惹きつけ、また、文化人が集う芸能・文化の支援者であり、中心的な発信拠点であった。現代においても、寺院・神社等の境内で、そうした伝統的な行催事の復興などにより、京都ならではの故事と現在を結び合わせ、生きた文化芸術による新たな集いを発信することはできないだろうか。

例えば、下鴨神社で行われた「糺河原（ただすがわら）勧進猿楽」のような勧進興行の復興事業がモデルケースとなろう。

⑤ 京のもてなし茶の湯・いけばな・和食 等

日本の伝統文化として広く世界に知られる「茶の湯」「いけばな」「和食」や「京菓子」「京の酒」は、京都の産業と不可分の関係を保ちながら京の土壌で培われてきたものである。世界中から京都を訪れる人々に、それら伝統文化のすばらしさを知ってもらうとともに、美や食がもたらす幸せを共有し、世界平和に貢献したい。

例えば、誰もが分け隔てなく参加できる大茶会として豊臣秀吉が催した北野大茶湯（1587年）のように、まちじゅうで様々にお茶がもてなされ、京都を訪れる多くの人々と一碗の幸せを共有できるようにする。「まちじゅう」のコンセプトに沿えば、茶室等に限らず、普段は喫茶スペースではない場所や、非公開の庭園などにも協力を呼びかけたり、このような趣旨でハーブティなど、日本茶に限らず様々なお茶を気軽に楽しめるイベントとして実施することも考えられる。

ユネスコ無形文化遺産に登録された「和食；日本人の伝統的な食文化」はそのルーツといわれる有職料理、本膳料理、精進料理、懐石料理、川魚料理、そしてそれらが融合発展した京料理や京菓子が「おもてなし」に果たす役割も大きい。料亭の競演から、京野菜、丹後・丹波・山城の海の幸・山の幸など京都の食の魅力を味わっていただきたい。

また、会場にはいけばなを生けていただき、来訪者を歓迎する。

⑥ 日本の文化・学術などに関するシンポジウム等

京都はこれまでの永い歴史の中、日本の学術を支えてきた。2016年に開設予定の国際京都学セン

ター、大学の公開講座や大学の博物館等で研究業績を広く紹介し、日本のアカデミックな魅力を京都から世界に伝えることも重要である。また、2017年に大政奉還・2018年に明治維新150年を迎えることを機に、東京奠都（てんと）による衰退の危機を乗り越え、今日の京都を築いてきた歩みを振り返るシンポジウムや、見学ツアー等の開催や、新選組映画特集といった、幕末～維新をテーマとする企画で歴史ドラマファンの京都ブーム再燃を狙うことも考えられる。

また、これまで千年紀の取組を行ってきた「源氏物語」など古典をコンセプトにした展開も考えられる。

⑦ 多様な実施主体が京都の文化の底力をみせる事業

上記以外にも、様々なジャンルで京都の文化の底力を見せることができる。先端技術にもまた京都の文化を背景とした創造の気概が光り、この機会に紹介したい。「京都とっておきの芸術祭」は20年の歴史があり、パラリンピックの開催にあわせた障害者の芸術イベントも考えられる。京都文化の形成に有形無形の支援をし、また大きな影響を受けてきた府

内市町村においては、北から南まで豊かな自然や永い歴史に培われた「海の京都」「森の京都」「お茶の京都」やその発展型の事業、日本遺産の体験・体感イベント実施等による連携活用や地域の様々な独自事業の2020バージョンなど、府域全体に京都の魅力を体現する事業が多数考えられ、これら全てを実行委員会が直接実施するものではないが、祭典を構成する主力事業として、参画・協力をお願いしたい。

⑧ 未来に広がる新京都文化

⑦までは、推進委員会が想定する範囲内の事業ジャンルであるが、このような既存の想定の枠内に収まらない、全く新しい文化の取組の提案が寄せられるかもしれない。また、双京構想[※]の実現に向けた取組を推進している京都だからこそ、歴史や文化、伝統を背景に、宮中行事の復活など未来につながる取組の提案も考えられる。

府民・市民から、さらに素晴らしい提案をいただければ、京都文化の未来にとってこれほど嬉しいことはない。

※ 双京構想の実現：皇室の弥栄のために、京都にも皇族の方にお住まいいただき、東京との双京を実現する

V 推進計画

2. 広報計画 に関する事項

1) 国内外に向けた情報発信

日本はもとより世界の人々に、東京オリンピック・パラリンピックを契機に、4年間を通して、スポーツだけでなく「もう一つの感動」を味わうために京都へ行こうと思っていただけるよう、同組織委員会と連動し、広報効果で最大化を狙う。

また、広報すべき時期には、訪日ターゲット層へすみやかに情報発信できるよう、事前に以下のような関係先との日頃からの協力関係の構築を進める。

- 組織委員会の広報と連動する

同組織委員会からの情報が世界発信の基軸となるため、その広報のタイミングやツールと効果的に連動するべく、組織委員会としっかり関係を構築する。

最初のタイミングは2016年リオ大会閉会時と考えられる。

- 訪日海外旅行者向けのウェブサイトとの関係構築
一般の海外メディアはもちろん、宿泊、エアラインのネットワークもメディアと捉えて、連携関係を築けるよう広報活動を行う。トリップアドバイザー（世界最大級の旅行口コミサイト）、やブッキングドットコム（アムステルダムに本拠を置く、オンラインホテル予約サイト）、アゴダ（シンガポールに本拠を置く、アジアを中心としたオンラインホテル予約サイト）などの訪日海外旅行者がよく利用しているウェブサイトとの関係を構築し、イベント開催に合わせた海外からの誘客を図る。

2) 統一シンボルマーク・ロゴマーク等の設定

多様な実施主体による多彩なイベントが、一つの旗印の下に、大きな祭典を形成して見えるよう、関連するさまざまな情報を系統的に整理し、最適化し、束ね、提供できるようにする。このため、統一シンボルマー

ク・ロゴマーク等の設定などの取組を行う。「オリンピック」等の用語を使う場合は、商標権の制約があるので、組織委員会のエンブレム（公募済み）公表スケジュールの動向などを見ながら、取り組んでいく。

3) ポータルサイトの運営

全世界に向けて情報発信するため、ウェブ上に京都文化力プロジェクトのポータルサイトを開設し、祭典に関するあらゆる情報がここへ集まるようにする。

検索しやすいドメインを工夫し、京都を発信する様々なサイトとのリンクを歓迎する。また、SNSほか今後現れるかもしれない新たな技術も含めた多様で機動的な情報発信ツールを活用する。

あらゆるユーザーへ対応するため、多言語対応・自動翻訳技術の精度を、京都文化力プロジェクトにも対応する形で、特定分野や脈絡の中で使われる正確な対訳を収集・蓄積し、翻訳ソフトに学習させる。その

ために、ネイティブスピーカーの留学生などへ協力を求める。

関連映像の投稿を円滑に進めるため、事後の映像の公開について著作権等の権利関係を整理できるよう制度を整える。

こうして成長したポータルサイトは2020年以降も京都ポータルとして運用されるよう実施主体を引き継ぐ。なお、このようなアーカイブ情報の資産には大きな価値があり、そのデータの保全のため、安全な保管に向けた方策を講じる必要がある。

(参考) 2021までの主なイベント等

	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021
東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会	リオ大会 エンブレム公開 文化プログラム開始					大会本番 オリ：7/24～8/9 パラ：8/25～9/6	
周年事業等のコンテンツ(例)	プレ ・京都国際現代芸術祭 ・琳派400年記念祭 ・海の京都博 ・日本遺産認定(日本茶800年の歴史散歩) ・ユネスコ記憶遺産登録「東寺百合文書」 ・「舞鶴への生還—1945～1956シベリア抑留等日本人の本国への引き揚げの記録—」 ・京都市動物園リニューアル	キックオフ ・スポーツ・文化・ワールド・フォーラム(10月) ・伊藤若冲生誕300年 ・世界考古学会議 ・府立新総合資料館・京都学センターオープン ・森の京都博(全国育樹祭等) ・ロームシアター京都リニューアル ・全国商工会議所観光振興大会	・お茶の京都博 ・大政奉還150周年 ・東アジア文化都市2017京都	・明治維新150年 ・平清盛・西行生誕900年	・世界博物館大会 ・「京都祇園祭の山鉾行事」ユネスコ無形文化遺産登録10周年 ・「古都京都の文化財」世界遺産登録25周年 ・京都市美術館リニューアル	・丹後ちりめん創業300年 ・京都市立芸術大学施設の一部先行移転(予定)	・関西ワールドマスタースターズゲームズ ・宗祇生誕600年

V 推進計画

3. 財源の確保 に関する事項

事業の充実のためには財源の確保が重要である。公的な財源にあわせて各種団体や民間からの資金の提供を図る必要がある。そのためには、従来のような文化イベントへの企業協賛という枠をこえて、例えばまちづくりや文化芸術という領域への企業の投資がビジネスチャンスであるといったような認識ができるよう、事業の位置づけも考えられるようにする。また個々の事業でクラウドファンディング等により府民・市民、国内外の人々からも資金提供ができるような手法を設定し、事業への参加を促し、盛り上がりをつくっていく。

(財源設定の例)

- ① 公的資金の充実と活用
 - ・文化芸術領域での財源の充実
- ② 民間協賛金等
 - ・企業協賛金
 - ・企業の社会貢献の促進
 - ・企業等の文化芸術領域への投資の促進
- ③ 新しい財源システム
 - ・クラウドファンディング等による個人・小口資金提供システムの設定と活用

イベントアイデア募集等で寄せられたアイデア

応募者数：76人、意見総数：159件

1 イベントアイデア募集で寄せられたアイデア

テーマ例	文化イベントのアイデア 【想定年、エリア】 ※□はイベント以外
① 伝統文化×現代芸術 京からオリンピックを祝う事業	○京都発「和太鼓リレー全国キャラバン」(仮称)【2018～2020/全国・全世界】
	○円山公園・ラジオ塔前広場や災害時避難所での一斉ラジオ体操 【円山公園、災害時避難所】
	○「新生京都打炎隊」による和太鼓演奏
	○竹細工を使った「おみくじ・願い文アート フェスティバル」 【神社仏閣、京都駅ビル、鴨川遊歩道など】
	○短時間・低料金で多くの体験ができる文化の「ラ・フォル・ジュルネ」 【一か所の施設または地域】
	○着物で二条城の周りに人の輪をつくるイベント&大茶会 【二条城】
	○名所旧跡での同時プロジェクションマッピング&実況中継 【煉瓦倉庫、府庁旧館、丹後・南丹・山城など府内各地】
	○東京オリンピック・パラリンピック記念博覧会 【博物館、美術館、特設会場】
	○多様な分野の芸術を集結させた大規模なフェスティバル
	○国際的な工芸の展覧会 【2020】
	○大規模な現代芸術祭 【2020】
	○日本文化フェスティバル（ジャパンエキスポ）のようなマンガ・アニメを発信する取組
	○海外の著名オーケストラを招聘した「京都音楽祭」
	○全国的な邦楽の音楽祭
	○世界の民族衣装の祭典 【2020】
	○「大地は器」（中国、韓国、日本の港町でのアート製作・展覧会） 【2017にブレ/舞鶴港、中国・韓国の港町】
② 京のまちじゅう博覧会	○府立総合資料館の柿落とし企画展「京都の古来からの食文化」 【2016/府立総合資料館】
	○酒井抱一等人物別コーナー形式による展示会（図録販売） 【美術館、博物館】
	○「豊臣期大坂図屏風」（オーストリア・エッゲンベルク城所蔵）の帰国展示
	○皇室ゆかりの施設や文化財などの公開
	○京都府域の祭りや風習の展示・実演等 【2020/京都文化博物館】
	○非公開文化財・文化資産の特別公開

テーマ 例	文化イベントのアイデア 【想定年、エリア】 ※□はイベント以外
② 京のまちじゅう 博覧会	○美術館・博物館の連携によるオリンピック向け企画展
	○非公開文化財の公開
	○京都の寺社総合美術館（特設宝物館）の京都駅周辺施設での開催（京都企業ミュージアムスポットを併設）【京都駅ビル、キャンパスプラザ京都、ぱるるプラザ京都、イオンモール京都、ホテルなど】
③ 京のまちじゅう 舞台	○オペラ「かぐや姫」（全2幕）の上演 【毎年/京都市役所前広場】
	○和柄のドレスと世界の旗のパッチワークのドレスによるピアノ演奏会
	○「ミュージックフェスティバル」「いつまでも世界は」など「街フェス」の同日開催
	○大念仏狂言が一堂に会する「京都大念仏狂言大会」
	○世界各国のお祭りや踊り（ダンス）を楽しむイベント
	○嵐山の渡月橋を舞台とした雅楽の舞や音楽演奏 【渡月橋】
	○ストリートダンスと伝統芸能のコラボレーション（「能舞台で行うヒップホップ」「太鼓でダブルダッチ」「雅楽でブレイクダンス」など）
④ 寺院・神社等で 文化発信拠点事業	○寺院の現代アート襖紙のデザインコンペ
	○京のまちじゅう博覧会（講話と拝観をセットにした連続講座）
	○有名寺院塔頭での日本の伝統文化の一気体験 【大徳寺、東福寺、妙心寺の塔頭など】
	○精進料理の料理教室 【妙心寺東林院】
⑤ 京のもてなし 茶の湯・いけばな・和食等	○平成の茶の遊（茶事「五輪」（薄茶・濃茶・懷石 会費制）【国立京都国際会館、茶室宝松庵、庭園】
	○京都・食博（仮） （クッキング大会、素材やジャンル別ガチンコ対決、新料理開発、日本酒に合うアイデア料理等）
	○茶の湯文化でおもてなし（お茶ゆかりの地でのお茶のイベント）【高山寺など】
	○鴨川大茶会（北野大茶会の21世紀バージョン）【鴨川河川敷】
	○伊藤若冲生誕300年記念「平成の大茶会」【2016/各商店街】
	○日本料理店等で和食特別メニューの均一料金での提供
	□和の文化（茶道、華道など）を一層普及するような取組
⑥ 日本の文化・学 術などに 関する シンポジウム等	○明治維新150年を振り返り、今後の都市像と人類社会を展望する連続シンポジウム・展覧会など 【2016～2020】
	○宮廷文化の世界祭典・記念催事など（明治維新150年、今上陛下御在位30年）【2016～2020】
	○近現代の「京都大礼文化」展覧会及び関連行事 【2018/市内国公立博物館・美術館、平安神宮、京都御所、京都市歴史資料館、京都アスニー、京都文化博物館、広隆寺・泉涌寺、伏見桃山御陵、二条城など】

テーマ 例	文化イベントのアイデア 【想定年、エリア】 ※□はイベント以外
⑥ 日本 の文化・学 術などに 関するシン ポジウム等	○明治維新150年展覧会 【2018】、東京オリパラ記念博覧会 【2020】
	○日本を代表する文化人や芸術家、学識者が集うシンポジウムとワークショップ
	○文化財の価値を再発見できるようなシンポジウム
	○国内外のキュレーター等が一堂に会するカンファレンス
	□スポーツ・文化・ワールド・フォーラムや世界博物館大会など世界的な国際会議の活用
⑦ 多 様な実 施主体 が京都 の文化 の底力 をみせ る事業	○ふれあいー芸おもてなし京都観光（腹話術とマペット・紙芝居による歴史文化・観光案内パフォーマンス）【京都駅、観光地など】
	○文庫・読書ボランティアとジョイントした人形劇団・児童劇団による民話や行事・文化紹介プログラム
	○大学教授による『辻講義』（20分程度、同時英語通訳（字幕）付） 【新幹線コンコース、京都駅前、コトチカ、四条烏丸ほか】
	○捨てる物でも再利用の一工夫（リサイクルワークショップ、ファッションショー）
	○ファブリックパネル制作等のワークショップ
	○障がい者と共に楽しむ「ボーダーレス ミュージック」のワークショップ&コンサート
	○授業参加と文化プレゼンテーション・体験（学校ベースの滞在型教育・文化体験）【府全域】
	○小・中・高校で伝統文化（和楽器等）に触れる事業の拡充、小中高生・留学生が外国人観光客向けに 実演・指導
	○地域の衣・食・住・その他文化をトピックスとしたワークショップ 【府全域】
	○食事のマナー講座（箸の知識、箸の作法など）&箸供養
	○外国語での十二単の着装講演
	○置屋で舞妓さん修行体験 【花街】
	○1日着物デー
	○「京都色々川柳」募集
	○「京都の文化芸術」をテーマとした外国語によるスピーチコンテスト
	○Instagram（無料の画像共有アプリ）のコンテストの開催（これぞ京都、観光誘致広告、有名企業・ 老舗広告）【～2020】
	○1人1枚着物写真をネットにアップ
	○「人は必ず笑い楽しむ」と「人は我慢の限度に至る」個人・団体の催し
	○食・住・遊をキーワードとした「シルクロード・フェア」

テーマ 例	文化イベントのアイデア 【想定年、エリア】 ※□はイベント以外
⑦ 多様な実施主体が 京都の文化の底力 をみせる事業	○ 1 大学 1 市町村アーティスト・イン・レジデンス「芸術大学村」&「大学村祭り」
	□ 京都市文化庁ボランティアの育成
⑧ 未来に広がる 新京都文化	○ 振り袖や袴を着た成人式イベント「京都デビュタントボール 【由緒ある建造物、旅館等】
	○ 国際現代芸術祭の継続開催
	○ 工芸ビエンナーレの開催など文化芸術と伝統産業の融合
⑨ その他	□ 4 カ国表示町名看板の設置（すべての町内、地域中心部、交差点など）
	□ 日本各地の伝統芸能上演劇場の建設（日本文化体験劇場、和太鼓センター）【～2020】
	□ 旅行者向け救護所インフォメーションセンターの常設 【空京町家、空家、公共施設、学校など】
	□ 「リニア京都駅」 想定位置の地上への京都文化フェア本部（事務局）の設置 【2016～2020】
	□ 京都市南部の景観整備 【伏見区など】
	□ 「京都国際衛星テレビ局」の開局
	□ 「京都デジタル歴史博物館」の構築
	□ ITと連携した京都観光マップの設置と京都観光アプリの作成
	□ 京都府域の祭りや風習のデジタル化、実物展示、実演
	□ 一年を通じた京都の文化資源のデジタルアーカイブ化
	□ 地域での取組、京都で既に行われている祭り、イベントの掘り起こし 【～2020】
	□ 京都の文化芸術を紹介するDVDの製作 【～2020】
	□ 「京都の記念日、祈願祭、供養 総覧カレンダー」の製作
	□ 「京都ゆかりの芸術家・文化人名鑑2020」の編さん・発行
	□ 伝統産業の地域を舞台としたアニメの作成 【毎年】
	□ 西洋音楽と伝統芸能・伝統文化が融合した舞台芸術の創作
	□ 古来襖紙の復興
	□ 通訳案内士とのコラボによるオプションツアー&各地での文化体験アクティビティの企画・販売
	□ 火の京都ー京都らしい夜の光の競演、昼と夜で違う楽しみの体験型プログラム（鵜飼い、千灯供養、七夕、五山送り火、火祭、花灯路など）

テーマ例	文化イベントのアイデア 【想定年、エリア】 ※□はイベント以外
⑨ その他	□京都市内電子観光パスポートの発行
	□伝統的な文化芸術の子どもや外国人向け鑑賞・体験プログラム
	□海外メディアとの連携など海外向け広報の強化
	□アーティスト・イン・レジデンスの強化など芸術家受入環境の整備
	□海外の芸術文化団体や文化施設との連携強化、若手芸術家の交流促進・創造活動への支援
	□文化芸術団体や芸術家等への支援（助成）
	□日本人気質、旧家の歴史や知恵の世界への発信
	□京都の伝統文化を世界に発信、祇園祭や五山の送り火を守り継ぐ
	□京都の文化芸術の演者や担い手、鑑賞者の支援につながる取組
	□様々な芸術家が公共空間（美術館や寺社仏閣、公園、道路など）を活用して発表できる仕組みづくり
	□小劇場演劇にも光を当てる取組



ワークショップの様子

2 ワークショップ等でいただいたアイデア

テーマ例	文化イベントのアイデア 【想定年、エリア】 ※□はイベント以外
① 伝統文化 から現代 芸術を 祝う事業	○サウンドアートの国際フェスティバル （パフォーマンスとワークショップ、アート展示、地域との交流プログラム）【丹後地域】
	○国際クラフトフェスティバル(伝統工芸の技術・素材・美意識を世界最先端のセンスとダイレクトに掛け合わせた見本市を軸に、招聘作家の国際コラボ展、衣食住空間展示やファッションショー、食談等) 【2020】
	○ランドマーク晴れ着プロジェクト（京都を代表するランドマークに晴れ着アートを着せる） 【2020/京都タワー、平安神宮大鳥居、渡月橋など】
	○祇園祭「トラディショナル鉦」&国際コラボ製作「ユニバーサル鉦」の競演 【2020/開会式ほか】
	○京都三大祭一堂展示（装束・道具類の展示、舞や囃子の実演など）【2020/みやこめっせ】
	○「Sound Down京都」（BGMの消音、その後梵鐘の一斉鳴鐘など静寂京都の体験） 【2020・開閉会式、2018.6～7月】
	○五輪聖火で灯す五山送り火 【2020/如意ヶ嶽ほか五山】

テーマ 例	文化イベントのアイデア 【想定年、エリア】 ※□はイベント以外
② ちのま 博覧会	○ まちなかアートプロジェクト（アーティスト・イン・レジデンス&芸術祭） 【2020/堀川団地・KYOCA・ヴィラ九条山・空き町屋等】
③ 京のまち じゅう 舞台	○ 府市民参加の創作野外劇 【毎年/庁舎や寺社など】 （「源氏物語」等をモチーフに、京の多彩な文化芸術を演者・衣装・舞台道具に結集した総合舞台作品の実施） ○ 「京都リアル基盤プロジェクト」（旧市街を基盤に見立てた囲碁の対局イベント、棋譜に応じてリアルタイムで街路上のLEDが点灯） 【京都市中心部】 ○ 「Kyoto Sunplugged 音楽祭」（太陽光発電を使用した野外フェス、フォーク・ロック・ブルースなど）
④ 寺院・神社等 文化発信拠点事業	○ お寺でのアーティスト・イン・レジデンスや展覧会実施 ○ 寺社仏閣（歴史）、お弁当（日本料理）、お茶のセット提供（寺社仏閣ごとに異なったものを提供） 【山城地域】 ○ お寺に伝来する文化を学べる遊び（イベント）の体験プログラム ○ 襖絵アートプロジェクト 【2020】（世界各国の現代アートを寺院の襖にインストール）
⑤ 京のもてなし 茶の湯・いけばな・和食等	○ お酒を飲みながら京都全体で外から来た方々をもてなす（主客が一緒に交流できる）夜のイベント ○ ホテル等宿泊施設でのいけばな体験など出前京都伝統文化体験プログラム ○ 二条城での「夜の生け花教室」 （非公開寺院等で京都の文化の担い手が日本の魅力を発信する海外のVIP向けプログラム） 【二条城】 ○ お茶の飲み方・淹れ方を工夫してもらいイベント（「玉露のうまい淹れ方コンテスト」） 【宇治】 ○ 外国人向け「宇治茶ムリエ養成講座」の実施と認定証の発行 ○ 「松露会」「宇治茶まつり」を発展させたお茶でおもてなしするイベント （現代アーティストとお茶屋さんのコラボ茶席、料理屋でお茶を中心とした特別メニューの提供など） 【宇治】 ○ 京都と世界の美と技を結集・融合させた「ユニバーサル茶室」での連続トーク&ディスカッションイベント （茶室を設営、内外のオピニオンリーダーによるディスカッションをネット中継） 【2016～2020/京都市内中心部】 ○ 「お茶ログ」プロジェクト（京都中の茶室を網羅したサイトで茶会参加者を公募） ○ 「ユニバーサル大茶会」（「My茶器」持参のみを条件とする服装自由・作法不問・年齢不問等の大茶会） ○ 「まちじゅう江戸酒場」（「和装」参加を条件とする酒肴、花・工芸・芸能等の体験プログラム） 【蔵・茶室・町屋など】 ○ 「名店食談」シリーズ（著名ゲストを囲む少人数での「食」と「談」の会をシリーズ展開） 【2016～2020/有名飲食店】 □ 「365日京料理」（日本の食文化を知ってもらう窓口サイトの開設） □ 総合的な文化としてのお茶をPR（机や茶碗など茶に関係する全てを「いいな」と感じてもらえる） □ お茶の効能（旨みが強く、ヘルシーで健康的な飲み物）をPR 【宇治】 □ 「3時にはお茶で一服」（キャンペーン） 【宇治】 □ 宇治を世界の「お茶の聖地」に 【宇治】

テーマ 例	文化イベントのアイデア 【想定年、エリア】 ※□はイベント以外
⑤ ばな・和食等 ⑥ シンポジウム等	□茶工場や茶園の見学型施設へのリニューアル 【宇治】
	□茶畑オーベルジュ(地産地消)の整備 【和束町】
⑥ シンポジウム等	○「モダン京都」(明治維新後の近代150年)をテーマにした展覧会、フィールドミュージアム、シンポジウム 【2018】
	○「宮廷文化」(公家文化・王朝文化)をテーマにした展覧会、フィールドミュージアム、シンポジウム 【2019】
	○トップアーティストへのプレゼンテーション (普通ではできない出会いやコラボレーションのプログラム)
⑦ 京都市の文化の底力を をみせる事業	○南丹市工芸家協会によるワークショップ ※既存
	○自然の中での展覧会「森の展示室」【京丹波町・わち山野草の森】 ※既存
	○外国人向けのお箏のワークショップ(子どもたちに外国人を教えさせる交流プログラム)
	□丹後で劇団結成 【丹後地域】
⑧ 新京都文化 に広がる	○お寺でのAIR成果や展示会出品品の奉納による後世へのアートの伝承
	○子どもや身体障害者向けのお箏の出前授業やワークショップ&コンサート ※既存
	□「丹後王国立美術館」 (各地域の「面白い人の家」マップの作成、丹後の面白い人と出会えるシステムづくり) 【丹後地域】
⑨ その他	○国内外各分野の第一人者とのディスカッション(シンポジウム、ワークショップなど)
	□わかりやすく文化性を損なわないサイン計画
	□デザインされた標識の整備
	□海外ラグジュアリー層の受入体制の整備(ショールーム、宿泊施設など)
	□一日三食「5秒間の祈り」(祈る習慣の世界への発信)
	□世界的なラグジュアリーブランドの創設(日本文化をベースにしたものだけでなく、西洋のことも踏まえた文化のブランドを立ち上げ、日本でオーダーメイドの鞆や洋服や靴など、ここでしか買えない素晴らしいものを提供)
	□観光客向けイベントへの地域住民の招待・参画(観光客と地域住民との交流)
	□市町イベントで近隣市町の各特産物を相互紹介 【山城地域】
	□子どもたちのものを大切にする意識を育てる(日常生活で良い器(気に入った器)を使わせる)
	□府内の展覧会や舞台芸術等がわかる広報誌等の作成・配布 □子どもたちが生きていることを実感できるような実体験型プログラム

[お問合せ先]

「京都文化フェア呼びかけ」に基づく推進委員会事務局

京都府文化スポーツ部文化交流事業課

電話 075-414-4279

京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化芸術企画課

電話 075-366-0033

京都商工会議所産業振興部

電話 075-212-6450

世界に開かれた
京都へ

京都文化カプロジェクト2016-2020基本構想の骨子

オール京都で京都文化カプロジェクト2016-2020の開催

文化勲章受賞者ら
からの呼びかけ

3つの目標

1. 世界の人々に京都の魅力を伝え、もてなす基盤をつくる

基盤整備

- ・京都の人が京都の文化を知り、大切にすること
- ・国内外からの来訪者を迎える環境の整備
- ・文化・観光情報の収集、蓄積、提供
- ・外国人への言語、災害時対応等充実

2. 世界の人々に京都の総合的な文化力を提示する

イベント・プロモーション

- ・多様な主体が主催者として参画
- ・京都全域を舞台にし、地域振興にも貢献
- ・段階的なイベントの実施
- ・京都文化の良さを失わず、伝統産業を活性化
- ・各種イベント情報の提供と保存

3. 世界の人々と協働し、新たな創造の潮流を起こす

伝統を活かした創造支援

- ・京都の伝統文化をきちんと伝える
- ・京都の伝統文化を支える人々の活動の場をつくる
- ・伝統を活かした創造を生み出すしかけづくり
- ・国内外の若い芸術家等を呼び込み、垣根(くつぽ)とする
- ・若者の参加

- 国や東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会等との関係構築、関西広域連合等との連携
- 行政・経済界が一体となって協力し、オール京都で推進

推進方策

事業構想

基本事項

- 名称 : 京都文化カプロジェクト2016-2020 ※国が推進する文化プログラムの名称に合わせて調整
- 期間 : 2016年-2020年 2016年10月の「スポーツ・文化・ワールド・フォーラム」がキックオフ事業
- 会場 : 京都府全域
- 事業主体 : 行政、経済団体、文化芸術団体・文化施設、観光関連団体、大学、住民団体 等

事業内容

インフラ整備

- ① 京都の文化財の保全
- ② 京都全体の観光地域の整備
- ③ 情報システムの整備
- ④ 国立京都伝統芸能文化センター(仮称)、国立デザイン工芸美術館等の誘致

行政が中心となって整備
オール京都で要望等活動

イベント計画

京都の特徴や蓄積を活かし、多彩な参画を呼び込み「まちじゅうを舞台」へ導くシンボリックかつ関連事業などの裾野の広いテーマ

中心となる8テーマの例示

- ① 伝統文化×現代芸術 京からオリンピックを祝う事業
 - ・オリンピックの開催を喜ぶ気持ちを表すため、世界から京都を訪れる人々と府民・市民が京都文化を楽しむ「宴」を開催
 - ・アート展示、音楽、いけばな、能・狂言、舞踊、インスタレーションなどのコラボレーションや、文化施設の回遊など京都らしい催し
- ② 京のまちじゅう博覧会
 - ・国公立4館が連携した京の至宝の一斉公開や、博物館・美術館、寺院・神社、庭園、伝統産業の工房や老舗店・旧家等の所蔵品公開
- ③ 京のまちじゅう舞台
 - ・楽劇、演劇、舞踊、伝統芸能などの舞台芸術や、誰もが参加できる「踊りまくり」イベント
- ④ 寺院・神社等で文化発信拠点事業
 - ・寺院・神社等の境内で、伝統的な行催事の復興などによる新たな集いの発信
- ⑤ 京のもてなし茶の湯・いけばな・和食 等
 - ・まちじゅうでのお茶のおもてなしや、京料理をはじめとする和食や京菓子、いけばなも多くの人々に楽しんでもらう
- ⑥ 日本の文化・学術などに関するシンポジウム等
 - ・明治維新150年、京都学、源氏物語などをはじめ日本のアカデミックな魅力を京都から伝える学術系イベント
- ⑦ 多様な実施主体が京都の文化の底力をみせる事業
 - ・先端産業、障害者の芸術、京都の北から南まで豊かな自然や永い歴史に培われた海・森・お茶の京都、日本遺産 等
- ⑧ 未来に広がる新京都文化
 - ・未来につながる府民・市民から全く新しい提案の出現を期待

推進計画

実行委員会の立ち上げ
参画呼びかけ

実行委員会の体制
理事会、企画運営委員会、
会員、事務局

広報計画
国内外に向けた情報発信等

財源の確保
クラウドファンディングの活用等

